

## 甲骨文字を刻すことについての教育実践

阿部泰秀

612-8522 京都市伏見区深草藤森町1番地 京都教育大学大学院

Educational Practice on Engraving the Kokotsu-Moji.

By Taishu ABE

Kyoto University of Education Graduate School, 1, Fukakusafujinomoricho, Fushimi-ku, Kyoto, 612-8522, Japan.

### 研究目的

現在中学生や高校生は、スマートフォン、パソコンなど電子機器によって活字を日常的に作り出している。ソーシャルネットワーキングサービス(SNS)を使って文章でコミュニケーションすることが多くなってきている。そのため手書きの「身体的感覚を伴った文字」を生み出す経験が少なくなっており、そしてこの傾向は今後ますます増えていくものと考えられる。

本研究では、現存する最古の漢字である甲骨文字を、実際に亀の甲羅に刻す体験を生徒にさせる。文字が生まれる瞬間を生徒に身体感覚で実感させることを目的としている。現在の教育によって生徒は甲骨文字が漢字のルーツであり、仏教伝来とともに漢字が輸入され、その漢字を基にカタカナやひらがなが生まれたことは知っている。その知識に血を通わせる一つの方法として、亀の甲羅に文字を刻す再現をさせたい。

書写教育は、文字を身体を通して生み出すことに大きな意義を持つと言える。実際の亀の腹甲に一文字刻す体験は、筆やペンで文字を書く日常では味わうことのできない、身体感覚を体験することができる。また、書道教育では、毛筆ではない筆記具で文字を記し筆触を確かめ、毛筆に還元させることで多彩な表現に繋げることが出来る。

### 甲骨文字

甲骨文字は3400年前中国が殷という時代だったころ、呪術政治に用いられていた。呪術政治とは亀の甲羅や動物の骨などに熱した棒を押し当て、その割れ方によって吉兆を占い、政治的判断をしているものである。その占ったことや占いの結果を記す為に甲骨文字が生まれた。当時の人々にとって亀の甲羅は神聖なものであったことが推測できる。

### 実践

下準備として解剖済みの亀の腹甲を30分ほど茹でて薄い皮を剥いて乾燥させておく(図1)。

実践では発掘された甲骨文字を参考にし、甲羅に下書きをする(図2)。彫刻刀で彫った後、切れ込みに朱墨を書き入れる(図3)。2016年3月7日に京都橘大学で行った実験的実践では彫刻刀、カッターナイフ、青銅刀などで刻してみたが、教育実践での使用はその彫りやすさから彫刻刀が適していると判断した。

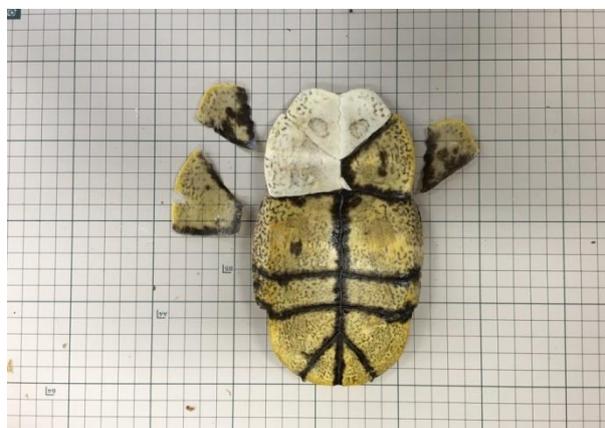


図1. 腹甲の薄皮を剥いている様子  
(2016年3月7日 京都橘大学にて撮影)

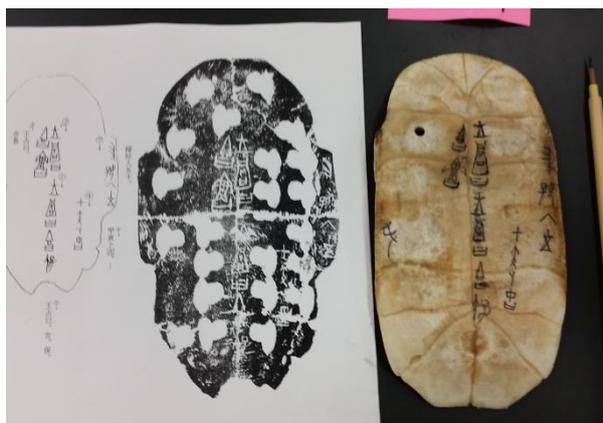


図2. 下書きをした腹甲  
(2016年3月7日 京都橘大学にて撮影)

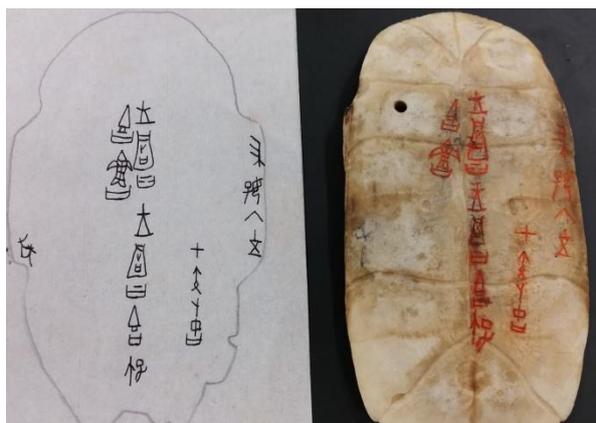


図3. 刻した後、朱墨を入れた腹甲  
(2016年3月7日 京都橘大学にて撮影)



図4. 生徒が刻した甲骨文字とその拓本  
(2016年11月11日 私立京都橘中学校高等学校にて撮影)



図5. 生徒が刻した「齒」という文字  
(2017年1月17日 名古屋市立沢上中学校にて撮影)

教育実践は以下の通りである。

- ・2016年11月11日 私立京都橘中学高等学校高校3年生「書道特講」高野早紀先生(図4)
- ・2017年1月17日 名古屋市立沢上中学校3年生「国語」小川拓海先生(図5)
- ・2017年2月9日 京都教育大学附属小中学校7年生「国語」阿部泰秀

まとめ

現在はスマートフォンやタブレット端末の発展により、いつ、どこでも情報を得られ、記録し、送ることができるようになった。そのような時代だからこそ、文字を刻すしか記録することができなかった時代に触れ、当時の人々の気持ちを知り、文字を残すということはどういうことなのかを生徒に考えさせたい。また、当時の筆記具が亀の甲羅しかなかったという驚きを生徒に感じてもらいたい。ここを起点にして教材開発・研究を進めることで、国語教育・書写教育・書道教育の新たな可能性を切り開くことができると期待する。なお、本稿で用いたカメは神戸市立須磨海浜水族園から提供していただいた。御礼申し上げます。

参考文献

- 佐野光一. 2001.『テキストシリーズ1 中国古代の書1 甲骨文』株式会社天来書院  
白川 静. 2007.『続 文字講話』株式会社平凡社